Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 趙鏞珍(著)「美人論」(2007年,ヘネム出版社)
Author(s)	金, 聡希
Citation	対人社会心理学研究. 9 P.131-P.138
Issue Date	2009
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5239
DOI	10.18910/5239
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/

Osaka University

書評

趙 鏞珍（著）『美人論』(2007 年, ヘネム出版社)
조용진『얼굴학자 조용진교수의 미인』
(2007, 해냄출판사)

美人論 —「美人についての全てが分かる一冊」—

「美人になりたい。」世の女性の願いは切実である。そのため毎日 1 時間もかけて化粧をし、膨大な費用を投資し、肉体的苦痛に耐えてまで整形手術に挑む者がいる。「美人」は、ある時には国を傾け歴史を動かし、ある時には何億円もの財を生む打ち出の小槌と化すであろう。

それでは一体、美人とは何なのか。美人とはどのような人なのか。美人になるにはどのようにすれば良いのか。本書は、美学的基準はもちろん、解剖学、人類学、図像学、社会学的研究を通した膨大なデータをもってこの問いに科学的に答えている。

著者の趙鏞珍(チョウ・ヨンジン)教授は、弘益大学校及び大学院で東洋画を専攻し、カトリック医科大学で 7 年間人体解剖学を研究し、その後、日本の東京芸術大学にて美術学博士学位を取得している。国立クンサン大学校およびソウル教育大学美術学科教授を歴任し、韓端大学教授と同大学付属顔研究所所長を務めた。その後、韓南大学校の特任教授も務めている。これらの経歴からも本書を読む前から分野に縛られない教授の博識ぶりを感じることができるのではないだろうか。

本書は全 9 章で構成され、私たちがどのように美人を認知するか、私たちの社会でどのような人が美人と認知されるのか、美人とされる人の顔貌、目鼻立ち等にはどのような基準があり、私たちはどのような顔を見て美しいと感じるのか、美人はどのような社会的意味を備えているのかについて教えてくれる。以降、章ごとに順を追ってレビューしていく。

1 章 美人とは何か —美人学序論—

本章では、美人に対する相対性や普遍性、歴史的美人の位置、美人の効率性増大による、新たな美人像の登場について述べられている。

美人とは 美人学序論として、まず、今日の「美人研究」の必要性が述べられている。私たちは TV や街角など、普段の生活でどこでも美人に会うことができる。個人によって美人の基準は異なるが、誰もが美人を好きである事実は変わらないであろう。美人は時と場所を選ばず、他者を感動させ理性を奪う、一種の麻薬のようなものであると著者は形容している。美貌度を定める顔の形態的差異は大きくなく、ほんの少しの違いが美貌度の評価に影響すること、また、時代によっても美人は大きく変わることが述べられているが、美人には種や審理を越える普遍性ももちろんあるとされている。具体的には、大きい目と高い鼻は 50 年以上も好まれ続けていることを明らかしている。また、美人はただ偶然に生まれてきたとしか言いようがないと著者は主張する。この言葉はすなわち、努力や遺伝の要素が大きくないということである。そして、美貌は社会的道具とも言えるとここでは述べられている。ほとんどの韓国人女性は美しくなる目的を「自己満足のため」ではなく、「異性からよく見られるため」と答えている。韓国人女性にとって美貌を磨くのは、ある能力を伸ばして社会的な存在価値を高めようとする行為と目的が同じであると著者はいう。しかし、この両者には唯一の違いがあり、能力を高めるのは社会に利得をもたらす有形的能力であるのに対し、美貌は無条件的快感や直感的快感、感性的快感を得る無形的能力であると著者は説明している。この美貌という能力を上手く利用すれば、人々に尊敬され、富と健康を得ることが可能であるが、むやみやたらに利用すれば、放蕩に頼り堕落した凡夫や、周囲から軽蔑され孤立する天才のようにもなり得るという。天才や財閥二世の場合と同じように、美人にも管理が必要であると著者は主張している。

いつの時代も美人が存在する 著者は、トロイ戦争のヘレンやエジプトのクレオパトラなど、歴史的選択に美人が担ってきた歴史的役割は大きいとし、今後、宇宙時代が到来した際にも、宇宙飛行士のストレス軽減として美人は一役買うに違いないと推測している。美人はその影響力から、いつの時代も警戒の対象となり、美しさが度を過ぎると災いを呼ぶ可能性が高いとされた事実もあると述べられている。

世界は再び美人世界に 著者は、歴史を振り返ると絶対君主制時代が、美人を重視する時代であったと主張している。権力者の寵愛を受けた美人は、その権力者と同等の権力をもつことができたのがその理由であると述べられている。そして近年、また美人を重視する時代が到来しようとしているとも述べられている。絶対君主制時代の美人は、財も才能も選択権もなく、その美貌だけで権力を手にしたが、これからの世界は、女性が男性と同等の教育を受け社会的地位を保つことができると著者は説明している。そして自分で運命を選択できるようになったという、女性にとっては喜ばしい現象が起きていることを説明し、社会的に美人を見る観点も多様になり、美人の種類も増えているとも述べている。朝鮮時代に 5%、100 年前に 8%、20 年前に 15%、現在 20%程度の美人の出現率となっているため、すぐに 25%、30%程度に増えるはずであると著者は述べている。美人が増えることで美人の形態も多様化し、ほんの数人の美女がブームを引き起こし、何万人もの男性の心をその動きや発言一つで動かす力があるという。しかし、美人への社会的要求や効用、影響力は増大したが、美人に対する基本的な研究は未だ進展していないと述べられている。今や、美人についても、その正義を正しくもち、方

向性を示し、そして、正確な概念化が必要な時代が到来しているとし、「美人研究」の必要性が述べられている。

2章　美人はどこにいるのか　―美人有脳論―

本章では、快感を引き起こす源泉、右脳と左脳、そして脳幹の、全脳を刺激する美人時代の到来について説明されている。

美人は快感である　ここでは、人が美人を求めてしまう理由を脳の機能から科学的に説明している。私たちが美人を求める理由はまさしく脳にあり、美人を見ると見た者の脳内の快感物質が急激に増加し、無条件に快感が引き起こされると著者は述べている。そして、美人とはすなわち「快感誘発者」であると主張している。

感覚的美しさを探す右脳　快感にも種類があり、理性で得る快感や感性で得る快感もあれば、本能的衝動の達成で得られる快感もある。それと同様に美人にも種類があると、ここでは述べられている。理性、感性、野性のそれぞれから、快感を起こす美人が存在するという。ここでは、顔の認知過程が詳細に説明されている。そして、多くの人は、人の顔全体を隅々まで記憶するのではなく、特徴的な部位のみを記憶して再び会うときにその情報を利用する。目から入る視覚情報が到達する一次視覚皮質は、右眼から入る情報と左眼から入る情報がお互いに同時に入力・処理され、左右の眼から入る情報の微細な差を区別することが可能である。人の右側の顔は見る者の右脳の一次視覚皮質に、左側の顔は見る者の左脳の一次視覚皮質に到達する。全ての視覚情報は1秒に30回、左右の脳の各一次視覚皮質に入力される。この左右の情報はそれぞれ合わさることなくそれぞれ入力されるため、人は片眼で人を見てもそれが誰だか認識できる。普通の人は、右脳左脳それぞれに入力される情報のうち、片方しか処理しない。相手の右側の顔のみを重視する人は左視野型、その逆は右視野型である場合が多い。韓国人は左視野型の人の割合が全体の 4 分の 3 になる。このように、私たちは知らぬ間に人の顔を半分しか見ないで何十年も生きてきたという、驚きの事実が示されている。

普通の女性は右脳型美人　右脳は感性で、左脳は理性的働きをすると一般的に言われるが、ここでは、顔認知においてもその機能が働くことを説明している。ダビンチのモナリザは女性であるが、その顔に男性であるダビンチの顔が含まれている話は有名である。有名女優の顔はよく見ると男性的で、逆に俳優はよく見ると女性的であるし、アメリカの名俳優の顔を見るとアフリカやアジア・ヨーロッパ、そして成人と子どもの全ての顔が含まれているそうである。このように、有名女優や俳優が性別や人種を越えて中性的な理由は、感情的経験を記憶し判断する扁桃体が、視覚的に中性的である顔を友好的に評価するためである。人は顔に慣れると扁桃体が安堵感を与え、安堵感は快感を害さないからであると、ここでは説明されている。慣れることで美しく見えるため、普通の女性は右脳型美人になることが可能だという。右脳型美人とは、「視覚的に慣れて見やすい美人であって平均的顔の美人」と著者は定義している。

知性美と左脳　右脳は感情的に人の顔を見るが、左脳は分析的に見ると著者は説明している。左脳は顔の広さや目の大きさ、眉毛の濃さなどを分析的に見る。顔についての研究学者や画家などはこのように人の顔を捉えるという。また、左脳は、教養があり、家柄のいい女性に好感を抱くよう作用する。このように、左脳は現実的な利益を計算して相手を評価する働きがあるため、著者は「無条件的な愛」とは言いがたいとしている。

フェロモンに惹かれる脳幹　肌質や匂い、動作のように動物的な情報は脳幹と辺縁系で処理される。そして、人も含め全ての動物の生殖行動には、フェロモンが関与し、フェロモンは 1 つの個体から分泌され、他の個体の行動に影響を与えるとここでは説明されている。フェロモンの感知には脳幹が関与し、脳幹の感応により快感が起きれば、より魅力的に見えるためにその相手は「美人」になると著者は説明している。

脳が作った3つの美人像　西洋美術に有名な三神美を描いた絵がある。理性的美人のアテナ、感性的美人のヘラ、肉体的美人のヴィーナスである。この 3 つの要素が調和されたのが最高の美人である。美人を目指すのであれば、理性的左脳、感性的右脳、野性的脳幹に均衡に快感を起こす人にならなくてはいけないと著者は強く主張している。

未来は全脳型美人時代　原始時代、古代王制時代、中世キリスト時代など、時代によって脳が求める美人は異なる。そして現代は、右脳・左脳・脳幹の全体を刺激する女性が求められているとここでは述べられている。

3章　美人は誰なのか　―美人社会学―

本章では、人体美の条件と、美人とされる人が若き未婚女性である理由、そして、社会性が反映された美人の姿及び美人に対する誤解について分析をしている。

有用であることこそが美しい　著者は、美しさとはすなわち有用性であるとしている。文化や時代により、何に有用性を感じるのかは異なるため、美の判断は絶対的ではないとしている。しかし、人には外すことができない 3 つの有用性があるとも述べている。生存、生活、そして繁殖である。この繁殖の有用性こそが、一般的にイメージされる美人が、若い未婚女性であるという理由につながるという。繁殖という点において、若い未婚女性が最も有用な存在であるためであると、人類学的な視点から根拠が説明されている。

美人は時代が作る　今後美人は増え続けるであろ

うと著者は主張している。先進国である方がより美人が多いとし、韓国と日本は 20%、アメリカは 23%程度の女性が「美人」と評価されている。これは実際に美人が多いというよりは、美人を見る目が多様化しているからであり、経済成長と民主化により各個人の主観が強くなったからであると著者は分析している。また、女性の社会進出により、容貌だけではなく業務能力やリーダーシップなど美人を評価する項目が多くなったからであるとし、美人の多様化について述べている。著者は、一人の人が美人を見る目を養うまでに作用する社会的要因の影響は大きいとし、今まで見た顔の平均が美貌感の形成の根本であるため、その者の接した顔が大体どのような顔であるのかが重要であると述べている。痩せているのが美しいとする風潮が蔓延している近年は、小学生でもダイエットに苦労するなど、その社会の風潮が価値観に作用すると、ここでは説明されている。また、人口密度や個人間距離・社会的距離にも関連するとし、美人を見る側に働く環境要因の重要性を著者は示している。

美人は本当に薄命か 「美人薄命」という言葉を、多くの人は聞いたことがあろう。著者はその真相についても迫っている。歴史的美人を例に挙げ、アジアにおいては「美人薄命」は定説になっていることが述べられている。そして、朝鮮時代のように男尊女卑思想の強い時代は、男性に左右され、女性は能動的に運命を選択できなかったため、そのような可能性があるとし、しかし現代は、美人は自分をよく管理さえすれば、自分の商品価値を高め、多くの幸福を得ることが可能であると主張している。具体的な美人管理法は後の章に詳細に記載されている。

美人に関連した風説の真相 常に注目を浴び続ける故か、美人についての風説は多い。ここでは、本書から、興味深いいくつかの風説を取り上げて紹介する。まず、「双子には美人が多い」と言われている韓国の説を挙げる。著者は、顔写真を使って、双子とその兄妹の容貌比較を行った実験を挙げ、双子が他の兄妹より美人だという結果は得られなかったことを示した。しかし、双子が美人である場合にはその兄妹も美人であったとのことである。確かに、容貌遺伝子が美人を作るという事実は、血を分けた家族の顔が似ていることから評者にも容易に想像できる。それでは、なぜ双子なのか。その答えは韓国の遺伝特性にあった。著者によると、韓国の双子は、南方系(韓国人を識別する顔タイプで、目の大きい特徴の顔)の容貌遺伝子を持つ比率が高いからであるという。そのため、目の大きい人が美人と評価される現代においては、双子が美人と言われるのはある程度妥当であると著者はその可能性を支持している。また、「美人は声質が良くない」と言われる所以も同じで、南方系タイプの女性は構造的に声が低く厚みがあるためと分析されている。次に、「美人は色彩感覚が良い」とする説である。大体の美人は後頭部が小さく側頭部が発達していて、そこに南方系タイプの美人は目が大きく、色彩感覚を司る脳の機能が発達している可能性は高い。目が大きいと網膜の面積が増えるため色彩解析力が高くなる可能性は高いと、解剖学的にその可能性が示唆されていた。最後に、評者の興味を最も引いた風説、「美人の夫は醜男」である。街を歩く美人の横にいる男性の多くは、あまりハンサムには見えないのは評者一人だけであろうか。目を見張るような美人と比較された結果そう見えるだけかも知れないとも思われる。しかし、著者が導き出した答えはそう単純なものではない。著者は、やはり、美人の夫は平均的男性よりも感性が低く、また、容貌が悪い場合が多いと述べている。それは、そのような男性は左脳型で、脳幹の働きが弱くできているからである(脳型については 2 章参照)。そのような男性は少しの感覚的刺激では興奮しないため、かなりの美人でないと心を動かされない。また、美人は今まで言い寄ってきた男性に比べて、純真で真面目そうな男性に警戒心を解くため、二人が結ばれる可能性が高いと説明している。

4 章 美人はどこから来たのか —美人人類学—

形質(自然)人類学的に見た現代の韓国人の美貌観因子のうち、美貌上昇因子と美貌阻害因子、美人の顔の地域差の検証結果がここでは記されている。

形質人類学的に見た現代韓国人の美貌観 韓国人の顔は南方系タイプと北方系タイプの 2 つに大別できると著者はいう。まず、南方系タイプは顔が四角く、眉毛が太く、二重で目が大きく黒い。鼻は若干低く、小鼻がはっきりしていて、唇が厚く、耳たぶが大きく、肌が黒く、毛髪も太い。体型も、胴体が短く体臭が強く、ふくらはぎがほっそりしているとここでは説明されている。字面で見るとイメージしにくいが、日本で一般的に「濃い顔」と呼ばれる顔だと解釈できるであろう。北方系タイプの人は、多くの面で南方系タイプと対立する特徴をもっている。平らな顔に目鼻立ちは小さく一重で黒目の直径は 11mm 程度と小さい。睫毛と眉毛の色は薄く、唇も薄く、耳たぶは小さく、背に比べて胴体が大きく、ふくらはぎは大根足と言われる形が多いとされる。北方系タイプの人は、いわゆる「薄い顔」である。次に、顔型を骨格から説明している。著者は顔を横に三等分し、上顔(眉毛から上部が含まれる)、中顔(目、鼻が含まれる)、下顔(口から下が含まれる)とし、本書ではその特徴から顔を分析している。この分析法は顔を理解するのにも説明するのにも非常に便利でわかりやすい。上顔、中顔、下顔と分けたとき、容貌に最も影響があるのは中顔部であるとしている。

顔表面構造の南/北方系優性 ここでは、顔の表面構造における南北系優位性が上顔、中顔、下顔について系統的に示されている。

顔の骨格と表面の南/北方系調合形 顔を構成す

る骨格に上中下顔別に、南/北方系タイプがあり、また目鼻口のある表面にも上中下顔別に南/北方系タイプがある。すべての組み合わせからすると、顔には64通りのパターンがあるが、ここで紹介できないのは残念である。本書にはこの顔のパターンがわかりやすく示された表と、実際に顔写真を添え、その顔型が示されており、顔型を読む際の指針とすることができる。

美貌上昇因子と美貌妨害因子　やはり、顔にはバランスが大切である。北方系タイプには北方系型因子の中で美人に見える要素が必要であり、南方系タイプには南方系型因子の中で美人に見える因子が必要であると著者は述べている。それでは、具体的にその因子とはどのようなものであろうか。本書は顔型別に具体的に示している。南方系タイプ上昇因子は濃い眉毛に大きな目、瞳、長い睫毛、小さな鼻、横に広い額などであり、一方、妨害因子は太い毛髪、白い毛髪、黒い皮膚、厚い皮膚、厚い鼻などである。北方系タイプは高い背、細長い顔、中顔の発達、白い皮膚などが上昇因子であり、小さく細い目や小さな黒目、短い睫毛、横が狭い額、大きな顎などを妨害因子として挙げている。

美人顔の地域差　上記の様に顔が2タイプに大別されるのは、顔を作る遺伝子の数が少なく、対立形式でできているからであると遺伝学の観点から解説されている。昔は人の移動が少なく近距離結婚が多かったため、現代に至ってもこの2つの顔の特徴は保存されていると著者は述べている。そして、朝鮮の地域ごとに特徴的な美人顔が描かれた絵画の写真を掲載しながら、説明が試みられている。

美人の顔にも国籍がある　美人の顔にも国籍があると著者は主張している。それも先ほど述べた骨格 × 表面のパターンで説明が可能である。中国系美人は骨格―北、表面―北、韓国系美人は骨格―南、表面―北、日本系美人は骨格―北、表面―南である。非常にスマートに整理されており、イメージも沸きやすい。もちろん、具体的な顔の特長も示されている。まとめると、中国系美人は濃く長い眉毛が上に釣りあがり、大きく丸い目も釣りあがっている。額は横に広く、鼻は若干短く唇は分厚く小さい。韓国系美人は長い顔に薄く短い眉毛、小さく細い目、狭い額、狭く淵が細い鼻が特徴であり、唇は薄く小さい。日本系美人は眉毛が濃くかつ短く、目が大きく長い。額のヘアーラインが低いのが特徴的で、中顔部が発達し鼻が長く小鼻が高く唇が薄く長い。この解説を読み、日本系美人が最も美しいと感じるのは、評者が日本で暮らしていて、そのような顔を見慣れているからであろうか。

5章　美人から何を知ることができるのか―美人考古学―

本章では時代別・性別に美貌観の変換と変因を説明し、韓国・中国・日本の東洋3国の美貌観の差異を示し、美人が調和する場所の提示を試みている。

美人考現学　美人考現学とは、美人を通して現代を考えるという趣旨である。顔には本来色々なタイプがあるが、それを好む美貌観に、その時代を生きる人の心を読むことができると著者は主張している。現代韓国人は世代別に異なる美貌観を有しているとされ、60～70歳代は平均的・伝統的美貌観、50～60歳代はクラシカルピリオド美貌観、40～50 歳代は西欧的美貌観、10～20 歳代は漫画の主人公のような未だかつてない珍しい美貌観だと記されている。

現代韓国人の性別・世代別美貌観　著者はまた、顔のパーツごとにも現代人の好むタイプを明示している。目に関しては、男性と高齢者は二重の有無に執着しないが、女性は二重を望む傾向が強いとしている。女性は丸い目ほど良いとするが、男性は、長さと幅の差が100：27程度の韓国人の平均サイズの目を好むことを示している。美人として見られる鼻の形は、南方系タイプの中でも鼻先の贅肉がなく、広くない鼻である。唇に関しては、平均より分厚い唇が好まれるが、既婚層は輪郭線が丸く分厚い唇、未婚者は輪郭線が直線形である薄い唇を好むことが示されていた。配偶者の有無で唇の好みが変わるとはどういった理由からであろうか。

10～20 歳代はヘレニズム美貌観と通じると著者は述べている。ヘレニズム美貌観とは、中顔が上顔・下顔より大きいという特徴をもつ顔であるという。本来顎が大きい韓国人の中に 1%程度しかいない顔が好まれるというデータを示している。それほどに理想顔を有した美人は特別であるという事実がうかがえる。

美人の時代差　ここでは、世代による美貌観の違いを明白に示した実験を挙げている。韓国人とアメリカ人の合成写真を 50～60 歳代の韓国人に見せると「アメリカ人みたいだ」と答え、40 歳代に見せると「東洋系が混ざっている」と答える。20 歳代に見せると「異国人的できれい」といい、小学生に見せると「とってもきれい！」と答える。年齢が下がるに連れて西洋的な顔が好ましく見えるという結果になっている。韓国で数千年間続いた北方系顔志向の時代が終わりをつげ、南方系志向への世代交代がここ 50 年の間に起ったのである。また、著者は、美人は今後進化していくべき顔を先取りしているとも述べている。人は今後脳が徐々に発達し、頭幅の比率が大きくなるとし、美人は一般的な現代人よりも、頭幅の比率が大きいことをここでは説明している。韓国人の顔は変化し、背が高くなるにつれ顔も若干大きくなったとし、特に脳を含む頭蓋骨部位が大きくなり、頭幅と顔の横幅が大きくなり顎関節が合わない副作用が起きた事実を述べている。

時代別美貌観の変化と変因　ここでは、時代別の美貌観の変遷を朝鮮の高句麗時代から現代に至るまでが示されている。その流れを順を追って説明する。高句麗時代は目鼻立ちが小さい北方系タイプの美貌

が好まれ、朝鮮時代の美人は儒教の影響により、子息を産む能力に長け、手先が器用など、女性的な要素が多い女性が好まれ、優しい顔が志向されたとのことである。戦後、美貌観は大きく変動し、西洋系志向が始まった。1945 年以後は、背も、目鼻立ちも大きく、姿勢も堂々とした人を美人と見なすようになったとのことである。そして 2000 年以降の近年再び、北方系美人が好まれ始めた。その理由は自国にはなく、日本を筆頭にした周辺の民族が北方系美人の顔を享受しているため、50 年間続いた南方系美人の時代には新鮮な、北方系美人が頭角を現してきたのだという。ここで、日本で起きた「韓流ブーム」が、韓国人の美貌観に影響を与えた事実が明らかにされている。また、70 年代には少女風美人が登場したという。その理由は歴史と深く関連しており、軍事独裁時代であった当初は、幼く、可愛い印象の女優が人気を得たとのことである。その時代の男性たちは妹のような可愛い女性に心の慰安を求めたのである。ここ 10 年間、日本でも同様の現象が起きていると著者は主張する。組織化された巨大な社会構造の中で、段々と矮小化される日本の男性は、収入が少なく、地位の上昇の機会が乏しく、怒鳴りつける部下もいないため、その攻撃本能を解消する道がないという。そして可愛い女性を好むようになったというのが著者の意見である。この傾向から、平穏感と消極的な生活を望む男性の心理により、「可愛い系」美貌観が作られたとされている。

アジア 3 国美貌観の差異　文化が違えば美貌観も、「美」にまつわる価値観も異なるであろう。ここでは日本・中国・韓国の三国比較から、美貌観の差異を検討している。調査の結果、日本女性は特に前面の顔を好む傾向にあると示している。日本人は左脳優位系が多く、概念的に顔を把握するためと著者は分析し、逆に、韓国と中国は、右脳が優性な人が多く、立体感も重視するため、斜め 45 度の顔も好むという考察に至っている。また、整形手術の動機を尋ねると、韓国人だけは自己のためではなく、他者に良く見られたいと答える人が多く、ダイエットのような自己管理として捉えているのである。72%もの人が整形手術は容貌管理のために必要だと答え、韓国と日本の整形手術に対する意識の違いを感じずにはいられない。韓国人に対する、容貌に関心を置く部位についての質問では、下半身に対する不満が 17.1%と最も高い。続いて体重、身長である。北方系の体型の人が多いため足の太さを気にする女性が多いためであろうと著者は考察している。美を決定付ける要因としてはやはり顔が 25.8%と最も高い結果が示されている。また、本章では 2002 年の 3 月に行われた、日韓で整形手術を受けた例の比較研究のデータがグラフ付きで紹介されている。対象は大学 2 年生の男女で、日本人は手術を受けた者は一人もいなかったが、韓国人は男性 1%、女性 8%と大差があった。

美人が似合う場所の変化　美人は、似合う環境と調和してこそ、より美貌は際立つと著者は主張している。昔から美人が似合う場所として馬上や船上、池などが挙げられ、なぜ似合うのか、どのような美人が似合うのかについて説明されている。例えば、乗馬が似合うのは、活発で明朗、外向的な性格の美人で、また、身分の高い者に愛され守られている印象を与えるためだという理由を添えて著者は説明している。近づくのが難しく、羨望と憧憬の対象であったことが、全ての美人の共通点であるという。

6 章　美人意味とは何なのか　―美人図像学―

本章では、絵画分析を通して、歴史上の美人の実態を究明し、美人観の変遷を説明している。

美術史の中の美人　美術作品に込められた意味を明らかにする学問を図像学という。著者は、芸術作品に込められた美人の意味を解明する試みを、美人図像学と呼び、美人を象徴する作品の解説を行っている。ビレンドルフのヴィーナス、ミロのヴィーナス、西洋の 3 美神、パリスの審判に登場する 3 美人(アテナ、ヘラ、ヴィーナス)、それぞれについての当時の美貌観や、込められた意味について解説している。西洋の美術作品に登場する美の女神であるヴィーナスは、ひたすら「好ましくない」者の象徴として描かれていると著者は主張する。ヴィーナスは美しさの中でも、肉体的美しさを象徴している。昔の賢人達は、精神的な美しさを象徴するアテナよりも、ヴィーナスを低い位置に置き、現在でも性病の英語名がヴィーナス病(venereal disease)であることからも、ヴィーナスの弊害が警戒されているということがわかるとする。それは、肉体的美しさが、一時的にではあるが人を盲目にしてしまうからである。人は人であるからこそ、判断を見誤ることがあるが、ここでは、その動機は大体、肉体的美しさであると述べられている。2 章を踏まえて著者の考えを理解することで、どうして肉体的美しさにはそのようなすさまじい力があるのかという問いの答えに行き着くことができる。

また、本章では時代別、国別に見た美人の姿についても詳細に記されている。ヘレニズム、中世キリスト、ルネッサンスなど有名な芸術作品が生み出された時代や、また、それ以前の古代の美術文化、朝鮮の百済や高句麗、中国の唐代の美貌観などにも言及している。ここでは、日本の江戸時代の美貌観について抜粋して紹介する。中世韓国と中国の文化的影響の大きかった日本が、自国の文化を創ったのは、徳川幕府時代の江戸時代である。約 300 年続いた時代、仏教の影響で美貌観が定形化された。そこで示された美人の条件 32 点が書物にも残され、当時流行した浮世絵に描かれた女性はその条件に沿っているという。しかし、それは現在の美人の条件とはかけ離れたものであったという。

美人図の 3 分岐　どの時代にも美人図があるが、

著者はその目的と動機はそれぞれ異なるとし、ここでは詳細に説明されている。皇帝に献上された美女を紹介するために描かれた画帖用美人図、意味を象徴する教訓図像、尊敬の対象を称えて描く記念像などが紹介されている。

7 章　美人はどのように構成されているか　―美人科学―

本章では、美人の顔が胎児の特徴を有することを述べ、また、美人のスタイルについても分析を試みている。

美人は胎児を志向する　ここでは、美人が普通の人とは具体的に何がどう異なるのかを、パーツごとに説明している。美人は偶然に生まれ、何万分の一の確率で存在するためにやはり特別であるはずである。しかし、本章では解剖学的に見ると構造はもちろん普通の人と同じであり、形態が若干異なるだけだと述べ、違った視点から美人を解釈している。また、発生学的に説明すると、美人の顔の特徴は胎児形をそのまま補完している顔であるとしている。具体的には、ふっくらした額や側頭、脳天と後頭は低く鼻が短く目より下の部分の顔が小さく、耳が下に付いている顔である。現代の美人の顔は、未成熟な童顔系の顔だという。

小さな違いが美醜を決定づける　美人と普通の人の顔の違いとは、いったいどの程度のものであろうか。ここでは実際の値を示して具体的に答えている。実際には部位の違いは2～5mm程度であるが、その差異を知ってこそ美人の正体を明らかにできると著者は主張している。美人は黒目の直径が 12.5mm と、11mm 程度が平均の韓国人に対して特別に大きい。もちろん眼球も大きく瞳孔間距離が広くなる。そして眼窩の直径も大きく、眼窩下縁線が下がり、眼窩上縁線は上がる。眼窩上縁線が上がるため目の位置も上がる。目の横幅も大きいため、結果的に眉毛も長くなる。このような目の周辺の解剖学的条件は、やはり南方系タイプの容貌因子とより相関が高いとされる。北方系タイプは二重である場合が 7～20%程度で、目が小さい。他の部位では、美人は下顎が小さく、唇が普通の人よりも 1mmほど厚い。また、眉間が広く、南方系タイプは眉間の幅が狭いため、特殊なタイプである。また、鼻に関しても北方系と南方系を組み合わせた、短くて(上顎骨が短いという意味)幅が狭い鼻であるため、やはり美人は珍しいということがわかる。

美人の小さな秘密　顔を上中下顔と分け、それぞれを平均より大きいか小さいかと二分した際、様々な組み合わせのタイプが生じる。美人の顔の縦の比率は、上中下顔とも小さい因子が合わさったタイプで、中顔平均が67mmであるのに対し、美人系は64mmとやや短く、下顔も62mmと小さくできている。額についての条件は、横幅 × ふくらみの度合い × 縦の長さで区分されている。美人の額は横幅が広く、ふくらみは大きく、縦幅は狭いタイプである。すなわち、南方系タイプの特徴である。最後に顎に関しては、幅 × 長さ × 突出程度の3因子で説明できるとしている。美人は幅が狭く、長さも短く、突出程度も低いタイプであると説明されている。

美人たちの公主病　大体の美人は心が読みにくいと言われるが、その理由は相手を凝視しないからだと著者は主張している。だから無頓着に見え、時には堂々としているように見えるとのことである。その理由は、幼い頃から褒められ、注目され続けることに慣れているため、自意識が強く相手に見られることを考え、相手を見ようとしないとのことである。美人は相手に尊重され続けて生きていくために、自己中心的で依存的な性格になりやすいとのことである。これは「公主病」と呼ばれる。容貌が良いことで内面に悪影響があるという可能性を著者は示唆している。美人の敵は結婚の敵である他の女性だが、最大の敵はやはり公主病である。

体幹と四肢の美しさ　顔がいくら美しくても、スタイルの美しさがそれに伴わないと、最高の美人になれないのは当たり前であろう。ここでは、「骨格・筋肉タイプによる、美人体質判定」とタイトルが付けられた表が掲載され、顔以外の身体の美しさのタイプと条件についても詳細に解説されている。人の容貌は筋肉と骨格でできており、発生学的には筋肉は外肺葉、骨格は中肺葉からつくられる。著者は、ファッションモデルの中で、背が高いタイプの美人は骨格型であるため中胚葉型、背が高くなく、額がふくらんでおり、色白な美人は外胚葉型と分類している。また、顔同様に身体部位ごとに美人の型を系統的にまとめている。ここでは部位の判別法は省略し、美人の条件のみを簡略に記載する。美人の手は顔と違い肉が少ない場合が多く、指は細い。上臀部(ヒップ)は発達し、下臀部は発達していない。脚の美しさについては、現代は特に注目されているが、美人は脚の長さに対して大腿が短く下腿が長い場合が多いとのことである。

8 章　美人はどのように作られるか　―美人技術学―

本章では、扁頭手術など、過去に流行した手術例から、二重瞼手術、補形物の挿入、皺の除去等、現代の整形手術の正しい知識と方法を紹介している。

美人と医学技術　医学技術が人を対象としている限り、整形手術を用いて容貌を美しく治すのも治療的には受容できると著者は主張している。整形手術を受けると、今まで生きてきた顔と全く異なる自分の顔を見ることで、心理的に不安定になる人がごくまれにいるとのことである。しかし、大体、美容整形手術は、満足度を指標とした場合、成功率が非常に高い。顔の変化に違和感を覚えるどころか、驚いたことに術前の自分の顔を見事に忘れさり、全くの他人の顔写真と一緒に示されると元の自分の顔を識別できない人も多いとのことである。韓国人の 86%は人生において容貌が一番重要だと

考えており、55%は整形手術をしてでも美しくなりたいという統計結果があると著者は述べている。これは日本で育った評者には、驚きのデータである。

扁頭術　朝鮮の古代カヤ時代にも整形手術は存在したと述べられている。それが「篇頭術」という、板のようなものを頭部にくくりつけ額を押して平たくさせる手術である。当時は現代と違って、額が平らな女性が美しいという美貌観があったことがこの例からうかがえる。

整形手術の影響　ここでは、整形手術による二次的効果とも呼べる現象について説明されている。手術した部位の形態が変わるだけではなく、顔全体に微細な変化が起きると著者は主張している。それが目鼻立ちなどの形態的変化によるものなのか、満足や自信などの精神的変化によるものなのかは解明されていないが、顔全体に影響が波及されるのは確実である。このことにより、著者は整形手術に反対する理由が減るという。容貌に自信を失っている若者がいたとき、後の人生のために、積極的な管理方法である外科的手術を受けることを、反対する理由がないと主張している。人は精神的な美しさや人格的な美しさを追求すべきだということばは永遠の真理であるが、容貌コンプレックスを克服しようと、外科的助けの必要性を認めるほうが賢明だと述べられている。整形手術は否定的な面よりも肯定的な面のほうが多いと、ここでははっきりと主張されている。そして、最も大きい肯定的な効果は「自信感」である。手術をしたことで、周囲の自分を見る目が変わり、期待値が高まることで、自信がつき、自尊心が高まることで積極的な人生を生きることが可能になるという。本章では、二重瞼手術、補形物の挿入、皺の除去等、整形手術の方法と、顔タイプによる適合について紹介されている。ここでは、最も顔の印象を変える二重瞼手術について紹介する。目は最も重要な部分で、数十分の一の違いが人相を変えるとここでは述べられている。大きく切開法と埋没法があるが、これは日本でもよく耳にする手術であろう。二重瞼手術は目を大きくするために行うが、術後の印象は顔のタイプにより3 つに分かれるという。1 つ目は、鼻が短く顔表面の凹凸が少ない南方系の顔の人が手術を行った場合で、最もよく似合い非常に満足度が高い。2 つ目は、美人度評価は上がるが、年老いて、更に印象が鋭く見える顔で、鼻が長い顔か、顎が大きな顔がこのタイプである。3 つ目は、やはり美人度評価は上がるが、全く別人に見えるタイプで、顔表面に凹凸が多い南方系タイプの人である。このタイプは東南アジア人やペルー人のような、異なる国のような人に見えるとのことである。このような結果が予測できる有益な情報は整形手術を考えている人には喜ばしいものであろう。

9 章　あなたの美貌度は何点か —美人評価管理学—

本章では、自分自身の顔の解読方法と、美人の評価法、自身の美貌度評価法が記されている。

自己評価は美人の必須要件　美貌はその他の能力と同様、天賦の才であるというが、反面、生まれもった能力が低くても努力で成功できれば、他者から認められる可能性もあるとされている。自己の美貌を高めようと思えば、客観的に自己の美貌度を評価できなくてはいけないという。ここでは、自己を客観的に評価するための様々な方法が示されている。自分の顔写真を撮影する、自画像を描く、姿勢を正し左右差を比べるなどがある。さまざまな美容法に手を出す前に、一度じっくりと自分の顔を分析してみる必要性を感じさせられる。

美人の顔の見方　人の顔を見て見習うのも自己管理術の必須の条件であると著者は述べている。そして、体質や脳の形態などから、容貌に関する客観的な分析が可能であるとし、その方法を示している。なお、脳の形態とは、脳の発達部位の違いが反映され、個人の能力により差が生じるものであると、著者は説明している。そして、脳の形態は頭蓋骨の形に反映される。したがって、例えば、額の形を見ることでその美人の脳の活動を探ることも可能だと著者は述べている。

美人の評価法　日本人は美人を評価する項目が多様である。教養や能力、社会的能力があるか、健康かなどであるが、これに比べて、中国人や韓国人は顔やスタイルなど容貌だけで判断すると述べられている。美人の評価法には古くから使われているものがあり、3 目評価法がそれにあたる。その他、自画像比較法や同心円グラフ評価法などがあるが、自画像評価法は、本書では写真による解説付きで紹介されている。自分の顔写真と、自画像を重ねて、その差を見ることで顔は小さく、目は大きく、などという願望を知ることができるという。

美人管理学　ここでは、美人に対してどのように接すれば良いのかを述べている。美人は脳幹が弱く、女性性が強調されて美しく見える反面、ストレス耐性が低くなるとのことである。そうなると、ストレスに耐えられずに公主病になってしまうため、その都度ストレスを除去すべきであると説明されている。

省略した部分も多かったが、「美人論」を全章に渡って紹介した。美人についての多くの特徴が、様々な学問的観点から、数多いデータによって説明されており、その意味で貴重な書籍である。美しくなりたいと願う者の一人である評者の感想としては、美人になるための具体的な方法が「整形手術」以外、特に記されていなかったことが残念であ

る。リハビリテーションで表現するならば、「患者を評価して、プログラムを立案し、治療する」、この一連の流れのうち、評価法に関しては様々な方法がエビデンスに基づいて説明されていたが、プログラムの作成法と治療方法に関してはほとんど触れられていない。美人を目指す全ての女性のために、今後はその具体的な方法について示していただきたいものである。そして、この書は「顔」について学びたい者や、「対人認知」について研究する者にもちろん薦めるが、「芸術」や「美術史」に関心のある者にも、非常に興味深い内容であろう。本書では、美人の描かれた壁画や、美人の石像など、数々の芸術作品の写真や情報が盛り込まれているが、ここで十分に紹介できなかったのは残念である。また、本書は「美人」について韓国人の顔を基準に、他国との、特に日本・中国との比較を通して解説され、韓国人のある種独特とも言える「美」に対する価値観を再認識させてくれる。本書は、何十年にも渡って「顔」や「美」について研究し続けた「顔学」の権威である趙鏞珍教授の集大成であり、韓国ではベストセラーとなっている。今後、対人認知や人の容貌について研究を進めていきたい評者にとっても、重要な参考資料となることは言うまでもない。

金　聡希（大阪大学人間科学部研究生）